巻頭言

「社会力」の育成こそ急務

筑波学院大学学長
門脇 厚司

1940年に中国の青島市で生まれ北京市で育つ。終戦１年前に両親の郷里山形県の庄内に帰り，小学校から高校卒業まで庄内で育つ。東京教育大学に進み，1970年東京教育大学大学院教育研究科博士課程修了。淑徳大学・日本経済新聞社・東京教育大学を経て，1978年から筑波大学で教鞭を執る。教授として人間学類長・教育学系長・日本教育社会学会会長などを務める。2004年４月筑波学院大学の初代学長に就任。『子どもの社会力』（岩波新書）ほか著書は35冊。現在，日本教師教育学会会長。

なぜ「社会性」ではなく「社会力」というのか

教育者の多くが「社会性を育てる」ことが大事であるとか，「社会性の育成」が教育の目標であると考えていたり口にしたりする。また，私の著書を読んで「社会力」という言葉を知っている人でさえ，社会性と社会力とを混同していたり，両者が同じ概念であると考えていたりする。つい先日（2006年10月上旬）も，札幌で行われたある学会の研究大会での講演の折りに，講演に先立つ私を紹介したなかに「門脇先生は社会性の重要性を主張されている」といった件（くだり）があった。私が，講演の冒頭で修正を求めたのはいうまでもない。そのようなわけで，ここではまず，社会性と社会力との決定的な違いから書くことにしたい。

「社会性（sociability）」という言葉の解説はほとんどの心理学辞典に載っているし，発達心理学系統の概論書でもほとんど例外なく使用されており，専門用語として世界的に通用している。こうした辞書や概論書によれば，社会性とは，基本的には「社会を構成する個人がその社会に適応している状態」のこととして解説されている。社会を構成している他の人たちと同じ言葉を話し，同じような考え方をし，同じような行動をしているということである。

これに対して「社会力（social competence）」は，1999年に岩波新書の１冊として『子どもの社会力』を上梓した際，私が新しく造語した言葉で，単に社会に適応しているだけではなく，基本的には，「社会を作り，作り変えていく（創る）能力」を意味させた言葉である。それゆえ，最近，少しずつ増えてきてはいるが，「社会力」が辞典や概論書などで一般的に広く用いられているわけではない。

こう説明しただけではまだ社会性と社会力の決定的な違いを理解できるまでには至ってはいないはずである。違いが鮮明になるのは，子育ての要諦や教育の目標ないし目的について論ずる際である。子育てに当たって，乳幼児期に「何を」育てることが肝要か，「何を」育て損ねたら後々厄介なことになるかを考え論じたり，意図的な教育が開始される小学校以降，中学校・高校・大学の教育で，若い世代の「何を」育てることを目標にし，目的にすべきかを考え論じるとき，社会性にするかそれとも社会力にするかによって，カリキュラムや教育方法に，また教育に携わる者の構えに決定的な違いが出てこざるをえないということである。

もっと具体的にいえば，「社会に適応できる人間」を育てることを目標にするか，「社会を作り変えていける人間」を育てることを教育目標にするかで，何を教え，どんな方法を採用し，評価のどの側面に重点を置くかに自ずと違いが出てくることは容易に推測できることであろう。わが国の社会の現状を踏まえてもっと立ち入っていえば，「金儲けのどこが悪い！」「能力差と努力差にもとづく格差はあって当然」「みんな自分のことが一番可愛いんだ，他人（ひと）のことなどかまっていられない」といった言動がまかり通っているような現在の日本の社会に適応する（社会性のある）人間を育てることを意図的な教育の目標にしていいかということになる。今の日本社会が必ずしも好ましい社会だとはいえないとしたら，そのような社会を変えることができる資質と能力を備えた（社会力のある）人間を育てることこそ意図的な教育の目標でなければならないのである。「危ない状態になっている子ども」を救い出すには，まずそこから改めなければならないはずである。

なぜ，今こそ「社会力」なのか

私が，社会性ではなく，社会力を育てることこそ重要と言い続けている理由の一端がお分かりいただけたと思うが，私が「社会力の育成こそ急務である」と主張する根拠になっており，もっと重要と考えている理由は他にある。その中の主たるものは２つである。

まず１つ目は，社会力を育てることが学力向上にストレートにつながるからである。日本の子どもたちの学力が低下したのは，文部科学省が「ゆとり教育」を推し進めたからだといった説がまことしやかに流布され，「そうだ」と思い込んでいる親たちや教師が少なくないが，学力低下の原因がそんなところにあったわけではない。最近は，不規則な生活や睡眠不足，変則的な食事や偏食など日常生活の乱れが学力低下の原因ということで，「早寝，早起き，朝ご飯」運動が展開されている。このほうが，「ゆとり教育」批判より的を射てはいるが，学力を低下させた本当の理由は3，40年も前から進んでいた社会力の衰弱にあることに気づかなければならない。

どういうことか。いずれ詳しく説明した一書をなすつもりであるが，社会力の衰弱，すなわち，多様な他者とよき関係を構築する能力の低下が脳の機能の低下をもたらし，低下した脳が学習意欲の低下を含む達成意欲の低下をもたらし，学習意欲の低下が学力の低下をもたらした，ということである。

人間は社会的動物であることを運命づけられた生物であるが，その社会的動物として備えているべき資質能力，すなわち私の言う社会力の低下ないし衰弱が遂に脳の機能にまで影響を及ぼすに至

「社会力」低下のドミノ倒し

り，向上心や知的好奇心を衰えさせ，学習意欲の低下となって現れ，そうした結果として学力の低下となって表面化したということである。

このような結論だけ言われてもなかなか納得してもらえないことだとは思うが，社会力と脳機能と学力の関連性については，近年進展著しい脳科学の研究成果や脳の構造や機能を調べるために開発された機器を使った実験によって確認し証明することはさほど難しいことではなく，社会学が構築してきた諸理論によっても説得的に説明できることである。

そうした作業をいずれなすつもりでいることは先に述べたところであるが，今は，結論だけ頭に入れておいていただくしかない。

私が「社会力の育成こそ急務である」という２つ目の理由は，社会力を培い育てることが，能力格差および階層格差に伴う社会的に厄介な諸問題を解決するための決め手になると考えているからである。これまた，最近になって，階層格差や学力格差が広がり固定化していると喧伝されているが，階層格差や学力格差の広がりと固定化が進んだのも最近のことではない。すでに30年以上も前に進んでおり確認されていたことである。私の著書でも何度か紹介してきたことであるが，朝日新聞の佐田智子記者が1983年に出版した『新・身分社会』（太郎次郎社）の中で，ずばり「いまや日本の教育制度は，社会的不平等を是正するどころか，さらに拡大再生産する方向に向かって猛然と突っ走っている。…貧乏人の子は，教育を受けることでさらに貧乏になり，金持ちの子はさらに金持ちになる。その構図が，すでにできあがっている」と言い切っている。念を押すが，佐田氏がこう言い切っていたのは23年前のことであり，そのような事態が進んでいたのは30年も前の1970年代後半のことである。

このような事態が進んでいるとして，教育学者や教育者は，このような重大な事態にどう対応するか。どのような教育を実行に移すことによって，このような厄介な事態を乗り越えていくか。この問題に答えることが，以来，研究者としての私の研究課題の中核を占めることになった。そして，出した１つの答えが「社会力をしっかりと育てること」であった。

ここで詳しい説明はできないが，すべての子どもに対して質のいい教育が実現されることになれば，結果として明らかになるのは個々人の能力の違いであり格差である。教育の世界では，今なお，よき教育を施せばどの子も同じ水準まで持ち上げることができるという思い込みが支配的であるが，同じ人間は１人として存在しないという事実を踏まえて冷静に考えれば，そのようなことは理論的にも現実的にもありえないことである。要するに，どうあがいたとしても，能力面での個人間格差を解消することはできないということである。

このような冷厳な事実を踏まえ，あるべき教育を考えたとき，出てくる答えは，能力に違いがある個人同士が，互いにいい関係をつくれるようになるしかないということである。能力差を超えて互いに信頼し信頼される関係をつくること，格差

が広がり固定化することに伴う社会的問題を解消し，社会を構成する全ての人間が生き生きとそれぞれの役割を果たすことで社会の活力を維持し続けるためには，社会の成員すべてが互いにいい関係をつくり，誰もが「私も社会の一員である！」という自覚と自負を持つようになるしかないということである。私が，社会力を定義づけ「人が人とつながり社会をつくる力」と言い続けてきたのはまさにそのように考えているからのことである。

子どもたちの「社会力」をどう育てるか

では，子どもたちの社会力をどう育てるか。これまで多くの機会に書いたり述べたりしてきたことであるが，‘乳幼児期から’というより，‘生まれた直後から’他者とりわけ大人と直接交わる機会をできるだけ多くすることに尽きる。

ここで想起してほしいのは，ヒトの子は先天的に人間と関わり応答するために必要な高度な能力を備えて産み落とされているという事実である。ここ3，40年ほどの間の新生児研究の進展はめざましく，ヒトの子が先天的に備えている数々の高度な能力を次々に明らかにしてきた。一例をあげれば，目に入る諸々のモノの中から人間の大人の顔を識別することができるばかりか，顔の表情を読み取りそれを模倣することができるとか，耳から入るさまざまな音の中から人間の口からコトバとして発せられる音をきっちり聞き分けることができるとか，外から加えられる力なしに動くモノは“意志なるもの”を持っていると認識しており，意志あるモノの動きはある目的にもとづいているのだと理解している，といったことである。こうしたヒトの子が先天的に備えている高度な能力はいったい何のための能力なのか。いうまでもなく，他者とりわけ大人と応答するために必要な能力である。

だとすれば，ヒトの子が持っているこのような能力をフルに稼動させさえすればいいのである。フルに稼動できるような環境を整え，回りにいる大人たちが子どもの能力を稼動させる適切な働きかけをし，子どもからの働きかけに適切に応答すればいいだけのことである。そうしてさえいれば，私が社会力のおおもと（大元）といっている他者への関心や愛着心や信頼感が確実に培われ育つのである。このようにして，2，3 歳までの間に社会力のおおもとが形成されていれば，あとは，それが動力となって他者に近づき，他者と交わり，他者とさまざまな行動を共にすることになる。そうしたことの繰り返しが，社会力を育て，社会力を強化することになるのである。

社会力が培われ育まれるのは20歳頃までといわれている。ということは，小・中学校の義務教育期間はもちろん，高校や大学で学ぶ期間にも社会力の育成と強化は可能だということである。2002年度から小・中学校で，2003年度から高校で必修化された「総合的な学習の時間」は社会力を育てる絶好の時間なのである。大学の教育でも，社会力の育成は十分可能なことである。因みに，私が学長を務める筑波学院大学は,「社会力豊かな人間を育てる」ことを教育目標に掲げ，つくば市の市民と一緒になって地域のさまざまな活動に参画することで，社会力を育てる教育を実践している。

社会力を育てることの重要性を認識し，その気になって本気でやろうとすれば方法はいくらもあると考えている。多くの学校や教師が，そうした決意を固め，社会力の育成に取り組み実行に移すことを期待したい。